

完璧なトンネル、イメージの国

ナビゲーター 森見登美彦（作家）

<「ジブリの教科書12 千と千尋の神隠し」(文芸春秋) より>

空白期の出会い

(略)

完璧なトンネル

溜息が出るほど素晴らしいのは、この映画の始まりである。

映画は主人公の千尋が、両親といっしょに車に乗って、引っ越し先の町へやってくるところから始まる。道をまちがえた彼らは、森の奥で暗いトンネルを見つける。そのトンネルの向こうには不思議な町が広がっていた。

両親は無人の飲食店で勝手に食事をはじめ、呆れた千尋はひとりで町をさまよう。やがて彼女は、湯屋の前にかかる橋の上でひとりの少年に出会う。「すぐ戻れ」と言われて引き返してみると、両親は豚の姿に変わっているのではないか。あっという間に日が落ちて、町には夜の灯がともり、怪しい影が跳梁し始める――。

今でもこの映画を観はじめると、吸いこまれるようにトンネルの向こう側へ連れていかれる。あまりにも滑らかに描かれているから、観ている間は何もかもが当然のように感じられるが、これこそ魔法というべきである。こんなにも強烈な吸引力をもって始まる映画を、私はほかに観たことがない。

まずタイトルが出るところでハッとしてしまう。

そこに描かれているのは高台にある新興住宅地である。千尋たちはその住宅地へ引っ越してきたらしい。丘陵を切り開いて造った住宅地で、「〇〇ヶ丘」などという名前がついているだろう。ぴかぴかした新築の家が整然とならんでいるだろう。

それは私の原風景というべきものである。

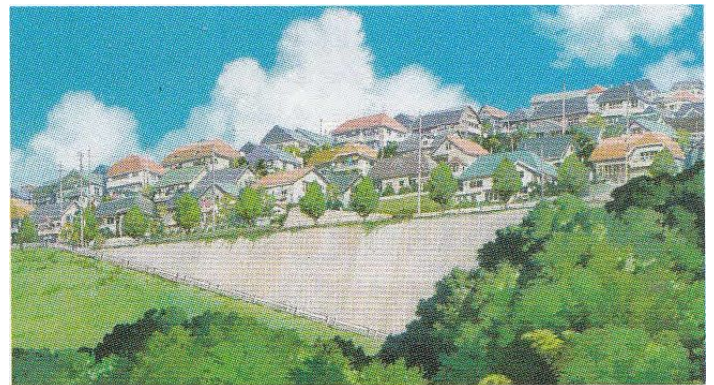
私が大阪から奈良へ引っ越してきたのは、小学四年生の夏だった。千尋よりも少し歳下ぐらいの頃合いであろうか。

大阪との県境にあるベッドタウン的な町で、かつては森や野原だった丘陵地帯に、「〇〇ヶ丘」と名のついた住宅地が広がっていた。やがて高校を卒業して京都の大学へ進学するまで、思春期的妄想力のピークにあたる時期をその町で過ごした。

高台から坂をくだれば川が流れて、その両側には田んぼが続き、昔ながらの農村風景が広がっていた。神武東征の折、九州からやってきた天皇を迎え撃ったという「ナガスネヒコ」の話を母から聞いたのも、そんな川沿いの風景を眺めながらのことである。自分たちは丘陵地帯に出現した歴史も何もない住宅地に住んでいるのだが、すぐ隣には古事記的伝説につながる奈良の風景があった。

新興住宅地と古い町の境目には神社や寺があった。それはあたりまえのことで、かつて神社仏閣が背負うようにしていた丘陵の森を切り開いて造られたのが新興住宅地だったのである。新しい町と古い町の境目は急坂や小道が錯綜していて、思わぬところへ通じていた。

・高台には新興の住宅地がある。



千尋が引越してきた住宅地。
私が子どもの頃暮らした町の雰囲気とそっくり。

- ・平地には歴史ある町がある。
- ・その中間には神社仏閣がある。

これは当時の私か身体でおぼえたシンプルな法則である。

「一本、下の道に来ちゃったんだな」

映画冒頭の父親の一言は、そのような位置関係を示している。平地の側からやってきた彼らは、高台の住宅地へのぼる手前で横道にそれてしまったのだ。そこは高台でもなく平地でもないところである。母親が道の脇に転がっているものを指して、「神様のおうちよ」とそっけなく言うように、そこは神社仏閣があるべき場所である。森の奥に不思議な世界への入り口があって当然といえる場所なのだ。

「不思議な世界への入り口は近所にある」

これこそ、子ども時代の私を支配していた感覚だった。

その感覚はその後も私の中で膨らみつづけ、ありのままの現実を受け入れることに抵抗させ、ついには私を小説家にしてしまった。

ここで思い出すのは父のことである。

子どもの頃、われわれはよくいっしょに「冒険」に出かけた。近所をぶらぶら散歩したり、車に乗ってドライブする。ときにはフェンスを乗り越えて森に入りこんだこともあるし、迷路のように狭い道に車を取り入れてしまって立ち往生することもあった。そうした小冒険のたびに、私は「この道が不思議な世界へ通じていたら——」と想像を広げ、夢想家として着実にステップアップしていった。

あの頃から四半世紀が経ち、現在の父は、私か小説なんぞを書く夢想家に育ったことを嘆いているが、そもそも私か夢想家に育つタネをまいたのは父自身なのである。親というものは、いつ子どもを「教育」してしまうか分かったものではない。

父は方向音痴であり、私は夢想家である。ふたりともボンヤリしているから、森の中や知らない道を進んでいると、自分たちがどこにいるのか分からなくなる。萩原朔太郎の『猫町』に描かれているような方向感覚の喪失が起こる。その漠然とした不安と、異世界に接近しているような高揚感が、私はたまらなく好きだった。怖いけれども、父もいっしょだから大丈夫であろう、帰りたいような帰りたくないような……。

そうしてウロウロしていると、よく知っている場所に出るのがつねだった。遠くまで来たつもりが、そこは意外に近所なのである。それは嬉しい驚きでもあり、拍子抜けすることでもあった。

映画の中で、暗いトンネルを抜けた千尋たちは、窓から淡い光が射す待合室のような空間に出る。千尋たちは電車の音を聞き、「駅が近いのかもしれない」と安心する。その感覚は私にとってお馴染みのものであった。

自分たちは異世界に迷いこんだのではなく、もとの日常へ帰ってきたのだという感覚。

「なーんだ」という感じ。父との小冒険が終わるとき、私か抱いた安心感によく似ている。しかし無事に家へ帰った父や私とはちがって、千尋たち親子はトンネルの向こう側へいってしまう。したがって、この場面で聞こえる電車の音には、相反する二つの意味がある。それは日常を喚起するものであると同時に、異世界の予兆でもあるのだ。

子どもの頃の父との冒険は楽しいものだったが、私は胆の小さなお子様であったから、基本的にはヒヤヒヤしていた。とくにフェンスを乗り越えたりするときはヒヤヒヤした。忘れられないのは、「勝手に入ったら怒られる」とおびえていると、父に「怒られたら謝ったらええんや」と言われたことである。その父の言い草は、じつに理不尽なものに聞こえた。私は「怒られること」それ自体がいやなのである。しかし父はまったく問題の所在を分かってくれないのである。「そういうことじゃない」と私は言いたかった。とはいえ、私はちゃんと父の後ろからくっついていったわけだが……。

トンネルの向こうの不思議な町に迷いこんだあと、千尋の両親は無人の飲食店で勝手にガツガツと食べ始める。千尋は「お店の人に怒られるよ」と言って手をつけない。「お父さんがついてるんだから」と父親は言う。この場面

でいつも思い出すのは、「怒られたら謝ったらええんや」という父の言葉である。千尋は「そういうことじゃない」と言いたかったことであろう。

この千尋の両親が勝手に食事を始める場面で、「なんと愚かな親であるか」と考えるのも当然であろう。しかし私は思うのだが、どんなに良い親であろうとも、子どもから見れば、こんなふうな愚かで凶々しく見える瞬間があるものだ。「モルタル製だよ」「テーマパークの残骸だよ」などと神秘的なものに迂闊な説明を与え、子どもの不安を理解してくれない大人たちである。「怒られたら謝ったらええんや」と発言した父も同じようなものかもしれない。だとすると、我が父も異世界に迷いこんだら豚になる運命であったのだろうか。しかしそれは、大人が子どもに対して見せる表情の一つにすぎなくて、それが大人のすべてというわけでもない。大人と子どもは、そんなにキレイに分けられるものでもない。

さて、ここまで私は何を書いてきたのか。

この映画の始まりがいかに素晴らしいかということである。

その完璧な冒頭には、新興住宅地と歴史ある町のはざまに存在する異世界への入り口がありありと描かれている。異世界に近づく不安と高揚を、手で触れられるほど具体的に、あっけにとられるほど僅かな時間で描き切ることによってこの映画は始まる。

はじめて宮崎駿の映画に夢中になったのは、ちょうど奈良へ引っ越した頃であった。テレビで放送された『天空の城ラピュタ』を観て、こんなに面白いものを観たことがないと思ったのを覚えている。その後、『風の谷のナウシカ』をけじめとして、ほかの宮崎作品も次々と観ていった。

宮崎作品は「ファンタジー」と言われる。

しかし私には、子どもの頃からファンタジーについての頑固な個人的定義があって、宮崎作品をファンタジーだとは思わなかった。自分の家の近所に異世界への入り口があるという感覚、なにかの拍子に自分はそちらにいつてしまうかもしれないという感覚、つまり神隠しが我が身に迫っているという感覚の再現だけが、私にとって意味があり、それこそが私のファンタジーなのである。

そういう観点で見れば、宮崎作品は遠い世界で繰り広げられる他の誰かの物語だった。『となりのトトロ』や『もののけ姫』にしても、「トトロがいた昔の日本」や「シシ神がいた昔の日本」を舞台にしているのだから、自分の世界とは地続きではないという感じだった。したがって、私か個人的に定義するファンタジーではないのである。二〇〇一年の夏にいたるまで、私は宮崎駿作品を面白いと思いきそすれ、自分の根源的な夢に響くものを期待してはいなかった。

そこに『千と千尋の神隠し』が現れたのである。

そのときはじめて、私は宮崎駿の映画に、自分が求めている完璧な「異世界への入り口」が出現するのを見た。千尋はかつての私だった。異世界へのトンネルは新興住宅地のすぐそばに、予想した通りの場所に存在していた。まるで父との冒険を、宮崎駿が背後で観察していたようである。私か見つけようとして見つけられなかったもの、子どもの頃から執着していた夢想、不思議なもの、ファンタジーが、この映画には克明に描かれていたのだ。

『千と千尋の神隠し』に衝撃をうけたのはそのためである。

イメージの国

(略)

帰ってくるということ

この映画は、終わりもまた印象的である。

千尋がハクと手をつないで町を走りだしたとき、それまでの湯屋の賑やかさとは打って変わって、あたりは急に

ひっそりとする。その静けさがまざまざと夢を思わせる。そのときになって、千尋を通して自分が映画の中で経験してきたことが、一気に遠のいていく感じがする。夜ごと自分が夢からさめる過程のことはぜんぜん覚えていないが、きっとこんな感覚なのだろうと思える。

異世界に入っていく過程も素晴らしいが、こうして異世界を去る這程も素晴らしい。映画がまだ終わらないうちに、トンネルの向こう側の世界が儚いものになってしまう。

かくして千尋は元の世界へ帰っていく。

それから彼女がどうなったのかは分からない。

さて、ここから先は私の妄想である。

私か子どもであった頃、じつは同じようなことがあったのだ。父といっしょに近所の森を歩きまわっているとき、千尋たちと同じようにトンネルを見つけた。「怒られたら謝ったらええんや」などと言う父といっしょに恐る恐るトンネルを抜けていくと、そこは不思議の町であった。

根性ナシの子どもであったから、千尋のように頑張れたとは思えないが。

豚にされてしまった父を救えるとも思えないが。

しかし父と私はきちんと帰ってきたという厳然たる事実から考えて、子どもの頃の私もまた千尋と同じように頑張ったにちがいない。幾多のピンチを乗り越えて、豚にされた父を救ったのである。そのことをまったく覚えていないのは、魔法によって記憶が失われているにすぎぬ。そう考えると、すべて合点がいく。なにゆえ私は子どもの頃から家の近所に異世界があるという感覚にとらわれていたのか、映画『千と千尋の神隠し』にあんなにも胸を打たれたのか。

その忘れてしまった思い出が、私を小説家にしたのだろう。

この文書は、次のサイトに掲載されているものです。

「生駒検定＜全国版＞問22」(<http://ikomakentei.seesaa.net/article/446770147.html>)

「小説『ペンギン・ハイウェイ』の舞台のモデル」(<http://shiminhfiles2.cocolog-nifty.com/blog/2017/02/post-ee09.html>)